
白昼夢の金縛り

由城 要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白昼夢の金縛り

【Nコード】

N0795Q

【作者名】

由城 要

【あらすじ】

真夏の真っ昼間に、私は金縛りにあった。人生3度目の金縛りに私は余裕を持って挑んだ訳だが、その結果は……。

(前書き)

ホラーと呼ぶほどのものではありませんが、ちょっとヒヤつとす
るかもしれないので、怖い話が全く駄目という方はご注意ください。

あまり自分の話はしない主義の私だが、たまには私の体験を話してみようと思う。暇を持て余している諸君には、暇つぶしとして聞いてもらえれば結構だ。

あれは私の若かりし頃、大学に入って初めての夏。夏休みの帰省ラッシュの波に吞まれるように、私は実家へと帰ってきた。

実家の夏は好きだ。夕暮れにパラパラと降り始める夕立、遠くに聞こえる雷鳴。そしてそれらが過ぎ去った後、カーテンを開くように視界に広がる榛色に染まる空。端には夕闇が滲み、自然のグラデーションにため息をつきたくなる。

「……」

一方で、真っ昼間は大嫌いだ。クーラーをつけると嫌がる老人達がいる。だから自分の部屋へと逃げるのだが、あまり部屋に引きこもってテレビを見たりゲームをしたりしていると、老人達に小言をくらう。

だから夏の真っ昼間は、一度部屋を閉め切り、空気をキンキンに冷やしてクーラーを止め、そして扉もカーテンも閉め切って昼寝を決め込む。これが私の、夏の実家での過ごし方だ。

「……極楽だ……」

賛否両論あるかもしれないが、意外と窓を閉め切ると涼しくなる。カーテンで日光も遮れば、そこは薄闇の天国だった。

私はその日も昼寝をしていた。部屋の外では蝉の鳴き声が五月蠅

い。これが蛙の合唱になるまでは、ここから出ないぞ、と目を閉じる。

夢は、何を見たのか覚えていない。何か白くて、もやもやしたものを見た記憶がある。それが何で、何の夢なのかは、説明出来るほど覚えていない。

夢の終わりは、まるで朝の目覚めのようにやってきた。すうっと意識が覚醒する。ただ、どうやらまだ完全に起きてはいない。意識が中途半端にあるような、そんな感覚だった。

ふと、私は部屋のドアが開いたことに気づいた。祖父か祖母か、それとも母か。父以外の人間はよく私の部屋に入ってくる。我が家にノックなんてマナーはトイレ以外で行わない。だから誰か起こしにきたな、と私は思った。

「……」

布団の中にもぐりこんで眠る私には、その気配しか分からなかった。部屋に入ってきたその人物は、私のベッドの足下まで来ると、足の上に何かを乗せ始めた。これは母だな、と私は思った。母は洗濯物を畳み終わった後、一気に私の部屋に運んできてベッドの上におく。さすがに寝ている時に乗せられたことはないけれど、昼間から寝ている私に対しての簡単な嫌がらせかな、と気にも留めなかった。

母が部屋に入ってきた時は、大抵寝ていることを確認したあと声をかけて起こそうとする。だから、しばらく自分の名前を呼ばれるまで、私はじっとしていた。

(……?)

気づくと、母らしき気配がない。部屋を出ていった音はしなかつ

たのに、部屋に入ってきた気配は消えていた。

私は拍子抜けした。そして同時に、そろそろ起きようという気になった。おそらく母は私を起こさずに降りていったのだろうと、そう考えた。

「……」

それにしても布団の上に乗せられたものが重い。そんなに洗濯物が溜まっていたのだろうか。ずっしりと押さえつけられた下半身はうまく動かなかった。

おかしいなあと思いながら、手を動かそうとする。しかし、奇妙なことに上手く動かない。まるで糸か何かでそれ以上動かないように縛り付けられているかのようだった。

嗚呼、と私は納得した。金縛りだ。

私は冷静だった。金縛りは当時、3回目だったからだ。初めては中学生のとき、これもやはり自分の部屋で寝ていた。その時は夜で、真夜中に部屋のドアが空き、白い影が枕元に立った。この時はさすがに初めてだったので非常に焦り、見てはいけないと目をきつく瞑って、思い浮かぶ呪文という呪文を唱えまくった。

2度目は高校の修学旅行の夜。食が合わなかったのか、三泊四日の日程のうち三日目にぶっ倒れた私は、同じ部屋の友人達を横目に部屋で寝込んでいた。すると30分くらい寝た辺りに、すうつと目が覚め、金縛りにかかった。丁度友人の2人が部屋の隅の方で泡盛を晩酌しながら、今というガールズトークをしているのを、金縛りと格闘しながら聞いていた。

そんな金縛り経験者の私は、なんとなくではあるが金縛りの解き方が分かっていた。金縛りは大抵、頭が半分眠っている状態だという。変なものを見るのも、頭が寝ているためだろう。

私は金縛りを解く方法は2つだと思っている。そのまま起きるか、

また眠るか。変なものが見える時は、怖い思いをするのが嫌なのでそのまま寝るが、今回はまだ外も明るい。変な気配も去っていった。だから、そのまま金縛りと格闘することにした。

「……」

心の中では唸っているのだが、声にはならなかった。とりあえず比較的動きそうな首から指先、腕、肩、上半身……徐々に体を動かして始める。なんとなくだが、外から差し込む夏の日差しが眩しくなってきた。もう起きているのと一緒にだろう。

よし、と私は手について上半身を起こした。金縛りを解き放とうと、ガバツと形容するが如く。しかし次の瞬間、私の視界は反転……否、90度回転した。

(?)

目の前が真っ白な天井に戻っていた。私は辺りを見回す。背中にはベッドの感触。そして布団は私の首もとまで覆っている。気づくと私は、再びベッドに寝ていた。

もしかしたら、『金縛りから起きる夢』を見たのだろうか。どちらにしても、目が覚めたのならそれでいい。私はまた体を起こした。

視界が90度回転した。

(!?)

さすがに混乱した。私は『金縛りから起きる夢から起きる夢』を見たのだろうか。さすがにこれは笑えない。まさか、と思いながら、今度はゆっくりと体を起こした。

再び天井が私の視界に戻ってきた。

二度あることは三度ある。徐々に私はパニックになった。何度起きても、何度起きても、そこは夏の昼間の私の部屋。まだ汚れの少ない壁紙を見上げながら、私は何度目だろうと途方に暮れた。

おそらく8回は同じことを繰り返しただろうか。徐々に背中に汗をかいてきた。冷たい汗がじつとりと背中を濡らしている。

どうすればいいんだろう、と私は何度目かも分からない天井と向き合いながらそう思った。思えば、私は何故、上半身だけで起きているのだろう。ガバツと上半身を起こす起床の仕方は、普通漫画以外でありえない。そのためには、足が固定されている必要があつて……。

私はハタ、と気づく。そういえば、足に乗っているこの重みはなんなんだろう。下半身だけは金縛りというより、重しに押さえつけられている感覚がある。よく考えれば、洗濯物はそんなに重かっただろうか。動けないほどの洗濯物なんてあるだろうか？

「……」

私は顔まで布団を被って眠るという、ちょっと不思議な癖を持っている。そのため視界は布団が60パーセント覆っており、足下の重みの正体を知ることが出来なかった。

とにもかくにも、布団の上の正体を知るより、この終わらない夢から目を覚ますことの方が重要だった。足の感覚からすると、どうやら足の上に乗っているものは3、4個の物体らしく、足をずらすと僅かに重みが少なくなった。

こうなったら、足の上に乗っている重みを全て落としてやろう。私は躍起になって足を動かした。バタバタと形容できるまで暴れたかは分からないが、布団の上のものは徐々に端へと移動し、最後に

布団を蹴り上げた瞬間。

ゴトンゴトンゴトン、とまるで岩をフローリングの床に落とすような音がした。

「??？」

次の瞬間、私の視界に天井が戻ってきた。見ると、被っていたはずの布団も下にズレ落ちている。私はそろりそろりと、起き上がった。辺りを見回すと、先ほどから変化のない真夏の私の部屋だ。カーテンから漏れる光が、少しずつ濃くなり、もうすぐ夕暮れが訪れることを教えている。

私はハッとして、ベッドの足下を見た。さきほどの、岩のような音はなんだったのか。フローリングの上を確認すると、そこにはタオルケットが一枚、私が暴れたせいで落ちていて、それ以外に重みのありそうなものは何一つ見当たらなかった。

背筋にぞくり、と冷たいものを感じて、私は慌ててベッドを降り、父や母のいる庭へと駆け下りていった。

……如何だっただろうか。

私自身、心霊体験のようなものはいくつか経験しているが、幽霊は信じていない。幽霊というものは科学的実証がされていないため、私は、幽霊の『ような』ものを見た、と考えるようにしている。だから、祖父が死んだ翌年の盆に祖父の姿を見たときも、祖父の幽霊を見たとは断言しなかった。それが彼の大好物だったスイカに手を伸ばしていたとしても、だ。

この白昼夢がただの夢だったのか、はたまたただの金縛りだったのか、はたまた科学的実証がされていない『もの』による、ちょっとした悪戯だったのか……。私には思い当たる節が一つだけあるのだが……ここは諸君の想像に委ねたいと思う。

（後書き）

『小説家になろう』さんの方に小説を移行させていただくにあたり、サイトの小説をただコピーするのは申し訳ないので、書き下ろしで短編を載せてみました。如何でしたでしょうか。

えー、非常に申し上げにくいことですが、これ実は実話でして……。私自身の体験を書かせていただきました。脚色したのは私の家族構成と、私のキャラクター（笑）のみです。

本文中にも書きましたが、これが「心霊体験だ!」とかいうつもりはなく、「人生生きてると不思議な体験もするもんだね」程度の主張でしかないので、皆様にもそれくらいのライトな感じで受け取ってもらえると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0795q/>

白昼夢の金縛り

2011年1月16日08時37分発行